

試験日 : 2025 年 9 月 13 日 (土)
入試種別 : 大学院入学試験(4 月入学)修士課程 秋期試験
学部・研究科 : 心理学研究科
科目名 : 専門科目

設問 I

1.

1) ⑤

2) ③

3) (A) : 正の強化 (B) : 負の強化 (C) : 正の罰 (または正の弱化) (D) : 負の罰 (または負の弱化) (E) : 逆制止の原理を用いた拮抗条件づけ (または逆制止(法))

4) 自分自身が直接経験しなくても、他者の行動やその結果を観察することで、新しい行動の習得につながる

5) 正の強化を用いて行動を増やそうとする際には、その報酬の価値や与えるタイミングなどに留意する。負の強化では、たとえば回避行動が固定化しないよう留意する。正の罰では、クライアントとの関係悪化やクライアントの恐怖等が生じる可能性を考慮し慎重に扱う。負の罰もクライアントのモチベーションの低下やはく奪された思いが生じる可能性があるので慎重に扱う。以上から、丁寧にアセスメントを行い、単独で用いるよりも複合的に用いたい。

2.

1) 経験の結果生じる比較的永続的な行動の変容ということについて、捉えられているかどうかを確認している。

2) 行動を生じさせ、その行動を継続し、なんらかの目標に方向づける一連の心理的な過程であるということについて、捉えられているかどうかを確認している。

3) 内発的動機づけに基づく行動に金銭のような報酬が与えられると、一時的に行動は増えるが、その報酬がなくなると行動は減少する現象であるということについて、捉えられているかどうかを確認している。

設問Ⅱ

1. ジェノグラムの解答例

本事例は、母親（35歳）、継父（41歳）、長女A（14歳）、双子（3歳）からなる再婚家族である。Aには不登校、双子には多動という問題が示されている。家族療法の視点からは、これらの問題を個人の問題としてではなく、家族システム全体の相互作用の中で理解することが重要である。

まず、再婚によって新たな夫婦サブシステムが形成されているが、Aは継父との間に心理的な距離があり、新しい家族システムへの所属感を十分に得られていない可能性がある。また、双子の誕生によって母親の関心が幼い子どもに向きやすくなり、Aとの関係性に変化が生じたことも考えられる。

家族内の境界を見ると、夫婦サブシステムと子どもサブシステムの間には比較的明確な境界が存在する一方、Aはどちらにも十分に所属できず周辺化されている可能性がある。再婚家族では家族構造の再編成が求められるが、その過程が十分に進んでいないことが推測される。

また、Aの不登校は家族の緊張や課題を表出するIP（Identified Patient）としての機能を果たしている可能性がある。家族の問題がAに集中することで、家族全体の葛藤が見えにくくなっているとすれば、Aは家族システムにおけるスケープゴートとなっているとも考えられる。家族内のパワーは母親と継父が握っていると考えられるが、Aの声やニーズが十分反映されていない可能性があり、そのことが不登校の維持に関与していると考えられる。

2.

ア オープンダイアログは、フィンランドで発展した精神保健実践であり、本人・家族・支援者によるネットワークミーティングを重視する。多声性（polyphony）を尊重し、問題の病理化や専門家主導の解釈よりも、対話を通じた意味の共同生成を目指すアプローチである。

イ トラウマインフォームドケア（TIC）とは、トラウマの影響に関する理解を基盤とし、支援対象者にトラウマ歴が存在する可能性を前提に関わる支援モデルである。問題行動を適応的反応として理解し、安全性・エンパワメント・主体性を重視して再トラウマ化の防止と回復を目指す。

3.

① 安全確保、② 通告、③ 配偶者暴力相談支援センター（または「DV相談機関」）

④ 自己決定権、⑤ 守秘義務

設問Ⅲ

1.

1) 【解答例】

個別の発達特性に関する理解や把握を目的とした心理的アセスメントとは、対象児が抱く困り感について、様々な角度から、発達の状態や特性を把握し、個々の発達課題やニーズを検討し、一人ひとりに合った支援方法を見立てていく過程といえる。児童期における心理的アセスメントの方法としては、フォーマルアセスメントとインフォーマルアセスメントを組み合わせる情報を収集し相互補完的、包括的に展開していくことが重要とされる。具体的にフォーマルアセスメントでは、知能検査、発達検査などの標準化された心理検査を実施していく。また、インフォーマルアセスメントでは、対象児の行動観察や面接、養育者や支援者との面談などを実施していく。

2) 【解答例】

心理的アセスメントは、主に課題解決のために必要な情報を集め、評価や分析をする一連の過程を指す。具体的には、個別の発達特性に関する客観的な情報や発達支援の対象となる事象における個々の課題やニーズ、生活全体の情報を収集し、どのような支援が望ましいか見立てる過程のことを意味する。こうした心理的アセスメントにおいて、生物的・心理的・社会的視点から対象児の具体的な発達支援を検討していくには、心理職だけでなく対象児に関わる各分野の専門家が、それぞれの立場からアセスメントを実施し、対象児の発達の状態や課題を多角的・多元的にとらえていくことが重要とされる。そしてその情報を互いに共有していくことが求められる。

2.

1) 【解答例】

評定尺度法とは、被検者について調べたい選択肢を提示して、被検者が自分にもっとも当てはまると思う項目を選んでいく方法である。長所としては、誰にとっても分かりやすく答えやすく、テスト結果の判定が簡易・迅速である点にあるが、短所としては、主観的な思い込みに基づく選択になりやすく、社会的望ましさの影響を受けやすい可能性がある。

2)【解答例】

被験者が一定の作業を一定の条件のもと作業課題をこなし、その作業の実施態度や遂行結果を分析することで、被験者のパーソナリティや心理的特徴を測定する方法である。被験者の言語的能力に依存しない方法で、回答を意図的に操作することができにくく被験者本来の特徴を捉えやすい。心理臨床現場の他、就職などの適性検査としても使用される。

3)【解答例】

神経心理学的検査は、知能、言語、記憶、注意、遂行機能などの高次脳機能を評価するための検査である。この検査は、被験者の認知機能、記憶、注意、言語能力、視覚的推理などの多様な心理的プロセスを測定する。具体的には、様々なテストや課題を通じて、被験者の脳の働きを観察し特定の課題を解決する能力を定量化して得られた結果を評価する。

設問Ⅳ

1.

1) 体験過程とは、直接感じられた、今ここでの体験（実感）の流れのことです。それは単に「内受容性のもの」ではなく、内側から伝わる身体を感じである。つまり、体験過程は、複雑で暗在的な意味を持っており、緊張しているとか落ち着いているなどの身体の内なる感覚を確かに持っているのです。そして、この直接感じる感覚（フェルトセンス）においてのみ、私たちは自分が言ったり考えたりする意味を持っていることを気づくことができます。フェルトセンスは、実際に有機体的であり、人が生きている状況におけるその人の次なるステップを形成しているのです。つまり、フェルトセンスに注意を向け、触れることで、その感覚に概念（言葉）が生じてきて、体験とその概念との相互作用が起こり、新たな気づきが生まれてくるのです。その気づきこそが、その人にとって新たな概念、つまり新たな自己概念を形成していくことになり、人格の変化へとつながっていくと考えられます。

2)

6つのステップとは、

- ①クリアリング・ア・スペースといわれるもので、気がかりを一つずつ置いていき、「空間を作る」と言われる作業である。

- ②フェルトセンスを見つける、という段階であり、取り上げた一つの気がかりについて、その全体的な感じを体で感じて、何か感じられ身体的感覚（フェルトセンス）を見つけることである。
- ③取っ手を手に入れる、言われる段階で、出てきたフェルトセンスに、ぴったりくる言葉やイメージを見つけることである
- ④共鳴させる、というもので、取っ手とフェルトセンスを響き合わせることで、その言葉がフェルトセンスにぴったりと合っているかを確認する。
- ⑤尋ねる、ということで、フェルトセンスに問いかけたり、触れたりすることでそのフェルトセンスとの交流を進めることである。
- ⑥最後は、受け取るという段階で、出てきたものはすべて大切に受け取るという段階である。

2.

- 1) 偽薬効果と言われるもので、本来は効果のない偽薬や治療を受けた際に、クライアントが「効く」と信じることで症状が緩和・改善する現象
- 2) 研究倫理に関する研究不正の一種であり、本来その研究や論文の知的作業に全く貢献していない人物を著者として論文に名を連ねる行為
- 3) 異なる人生や発達の経路を歩みながらも類似の結果にたどり着くことを示す等至性の概念を、発達の、文化的事象に関する心理学研究に組み込んだ質的な心理学研究法